



Title	物語の朗読におけるイントネーションとポーズ : 『ごん狐』の6種の朗読における実態
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化研究. 2014, 40, p. 257-279
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27621
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

物語の朗読におけるイントネーションとポーズ

— 『ごん狐』の6種の朗読における実態—

郡 史 郎

Intonation and Pause in Japanese Story Reading

KORI Shiro

Summary: This paper analyzes the prosodic features of oral readings of the famous Japanese short story "Gongitsune" performed by professional actors. Specifically, the level of tonal realization (either full level or reduced level) of each accent unit in a sentence and the use of pauses are the main interests of the study. The following results emerge. (1) Tonal movement in an accent unit is fully realized when the unit is not restrictively modified by the preceding unit or when it immediately follows the thematic particle "wa." (2) Tonal movement in an accent unit is reduced when it is restrictively modified by the preceding one, except for cases in which [a] the accent unit in question is in a long sequence of restrictive modification; [b] the preceding accent unit semantically functions as an additional explanation; or [c] the accent unit is semantically focused. (3) Tonal movement in an accent unit consisting of only a particle or an auxiliary verb is always reduced. (4) Additional tonal movement (beyond that required by accent) at the end of a syntactic phrase, which is frequent in spontaneous speech, is not observed. (5) Some performers realize dramatic tension and release by manipulating pitch level and speech rate. (6) Thematic phrases are often pronounced at a low pitch level, but this pronunciation appears to be optional. (7) Onomatopoeias are pronounced at a high pitch level. (8) Large individual differences are found in the use of pauses. (9) The length of a pause has a trade-off relationship with speech tempo.

キーワード：朗読，ごん狐，イントネーション，ポーズ

1. はじめに

本稿の第一の目的は、複数の熟練したプロの読み手による同一の物語の朗読を材料として、そのイントネーションとポーズの使い方に安定的に見られる特徴を記述することである。イントネーションについては特に「アクセントの実現度」(弱化しているかどうか)の実態について定量的に検討し、これまで主に短文の読み上げ音声の分析をもとに筆者が組み立ててきた理論が物

語朗読にも適用できるかどうかを検証する。また、付表として、具体的なテキストに対して模範となりうるイントネーションとポーズ挿入位置を示すことで、実践的な朗読活動や朗読教育のための参考資料としても利用できるようにする。これが本稿の第二の目的である。

物語の朗読音声の特徴についてはすでいくつかの研究があるが、本稿のような試みはこれまでなされたことがないように思う。ポーズについては中村敏枝(1987)、余郷裕次(1992)、杉藤美代子(1996)、大野眞男・三輪穰二(1996)、小森政嗣他(1999)、明石圭佑他(2007)などアプローチの異なる報告があるが、熟練した話者1名の事例研究か非熟練の複数話者に見られる傾向の記述がほとんどである。それはそれで貴重な成果であるが、話者の個人的特徴を捨象した上で、具体的なテキストの内容に対してどのようにポーズを用いるべきかについての情報は先行研究からは得ることができない。物語の朗読のしかたには熟練した話者ほど個人差があると思われるので、熟練者であっても1名の資料をもとに論を進めるのは危険である。また、非熟練の話者に共通の特徴があっても、それは模範としてよいものかどうかわからない。イントネーションに関しては、山田彩子(2007, 2009)、白勢彩子(2011)の報告があるが、いずれも試行的な定性的記述と言うべきもののように思える。

本稿では新美南吉の『ごん狐』(1932)の第一場面、分量にして全体の約三分の一、朗読時間にして5分から6分程度の部分をとりあげる。この作品を選んだのは、長期にわたって小学校国語教科書(四年)の教材として使われている人気のある物語で、著作権も消滅していることから、これを朗読した音源が豊富に存在し、それらを比較することで、単一の話者の癖や解釈ではなく複数の話者に共通する特徴を知ることができるという利点があるためである。

分析に用いる概念として「アクセント単位」「アクセントの実現度」「アクセントの弱化」「意味的限定」「フォーカス」があるが、それらについては3節(分析の方法)で説明する。検討の結果は5節でまとめる。

2. 音声資料

『ごん狐』の朗読音源として、この稿の執筆時点でCDあるいはDVDとして販売されているもの、スマートフォンのアプリとして購入できるもの、WEB上で公開されているものからあわせて27種、話者27名分を入手した。WEB上のものの場合、話者はプロではないことを明記していることもあるが、多くは一般向けの朗読会などでの活動もしている人のようである。ただ、出身地や経歴がわからないことが多い。

本稿ではこのうち「模範的」あるいは「じょうずな」朗読とすることができそうな音源、すなわち、もっぱら首都圏の生育で、『日本タレント名鑑』や『日本音声製作者名鑑』等に生年と出身地の情報、経歴とともに掲載され、他の文芸作品の朗読活動も多く行っているような経験豊富なプロの俳優や声優のもののみを取りあげて分析する。具体的には以下の6種の音

源で、いずれも CD として販売されているものである)¹⁾ (話者の生年順)。

- (1) 『光村の国語 名優で聴く 教科書名作朗読 CD ライブラリー』3, 光村教育図書, 2010 年
(朗読: 沼田曜一, 1924 年生まれ 2006 年没, 岡山県出身; 使用テキスト: 『国語四下』光村教育図書, 平成元～3 年度版)
- (2) 『新美南吉童話選集 1』エニー, 2001 年 (朗読: 岸田今日子, 1930 年生まれ 2006 年没, 東京都出身; 使用テキスト: 『校定 新美南吉全集』大日本図書)
- (3) 『聞いて楽しむ日本の名作』第 12 巻, ユーキャン, 2010 年 (朗読: 市原悦子, 1936 年生まれ, 千葉県出身)
- (4) 『朗読 CD 日本の名作 セレクト版』日外アソシエーツ, 2012 年 (朗読: 広瀬修子, 1944 年生まれ, 東京都出身)
- (5) 『朗読』心の本棚一心にのこる日本の名作童話』キングレコード, 2003 年 (朗読: 神保共子, 1945 年生まれ, 神奈川県出身; 使用テキスト: 『新編 新しい国語 四下』東京書籍, 平成 8 年度使用分)
- (6) 『(童話) ごん狐』Panrolling, 2008 年 (朗読: 佐々木健, 1969 年生まれ, 神奈川県出身)

音源 (1) のみ話者が岡山県出身となっている。これは CD 付属の解説や『日本タレント名鑑』に記載の情報であるが、実際はおそらく大阪市で生まれ、少年時代は大阪と東京で過ごし、東京府立 6 中を卒業したらしい (<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detail-jp/id/ref/M2013032712083165767>, 2013 年 9 月 22 日参照)。純首都圏の生育とは言えないが、この CD は学校備品用の指導用教材であり、実際に国語教育の現場で使われ、一定の影響があるもののように思われたので、本稿での検討の対象に含めた。ただ、後述するようにイントネーションの特徴として他の話者とは少し異なる点がある。また、使用テキストの性格上、初出の『赤い鳥』や『校定 新美南吉全集』のテキストから語彙を変更している箇所が 3、長音を短くしている箇所が 1 ある。他の音源にはそのような箇所はない。

3. 分析の方法

本稿では主にイントネーションとポーズについて分析を行う。この節では分析の方法と、分析の手がかりとして用いたいくつかの概念について説明する。

まず、ここでいうイントネーションとは、かつて考えられていたような文末や文節末での上昇や下降等 (以下、「文末・文節末の音調」) だけでなく、文全体における個々の語 (厳密にはアクセント単位) がその前に比べてどのような高さで発音されているかも含めている。

筆者は後者を「アクセントの実現度」と呼んでいる。これは、アクセントが頭高型か平板型というようなことではなく、頭高なら頭高でも、その高いところが直前の語に比べてはつき

1) 入手した音源のうち、音声に音楽が被っているものなどを除いた 20 種について、それぞれ 30～40 秒分 (付表の #82-161 の区間) を音声提示順を変えて約 20 名ずつ 2 群の大学生、計 41 名に聞かせて朗読の「うまさ」の判定を 5 段階で求めたところ、この 6 音源は上位 7 位に入った。その意味でこの 6 音源はいずれも「うまい」朗読と言えそうなものである。なお、子供による流暢性の低い読みのほか、ア・オの中舌化のような母音音色の逸脱、氣息性のある発声、ポーズ直前の母音の延伸 (無声化させたものも含め) が感じられる音源は、「うまさ」の評価が低かった。そうした音声は本稿では検討対象としていない。

りと際だつように発音しているか、あるいは高い部分を目立たないようにして、その直前の語に続けて一体化させるような形で発音するかというようなことである。アクセントの実現度として「非弱化」と「弱化」の2段階を考えるが(強い場合も非弱化に含める)、それらが具体的にそのような高さの動きとして表れるかはアクセントの型によって異なる。その例を付表の冒頭に凡例として示す。詳細は拙稿(1997, 2003)を参照されたい。

3.1 文末・文節末の音調の分析方法

文末・文節末の音調の分析にあたっては、音声を聞いて特徴的と判断した箇所をチェックし、これを拙稿(2003)で述べた音調型(疑問型上昇調, 強調型上昇調, 顕著な下降調, 上昇下降調, 平調)に分類し、音声研究用ソフト Praat²⁾を利用して高さの変化量を測定した。

3.2 アクセントの実現度の判断と意味的限定関係との対応の検討方法

アクセントの実現度の分析は、本稿では以下の方法で行った。

(1) まず、テキストを東京式アクセントのアクセント単位ごとに分割した。具体的な分割結果は稿末の付表に示している。付表での表記はかなを多用したものにし、読点はすべて削除した。以下、個別のアクセント単位について述べる際はこの付表における番号を付す。

アクセント単位は、頭高型、中高型、平板型などのアクセントの型を認定できる最小の単位とする。文中では文節に一致することが多いが、複合語の場合や付属語の種類によっては1文節が2単位以上からなることがある(たとえば「日本相撲協会だけは」は3単位³⁾)。本稿で扱う範囲では、助詞・助動詞の「まで」「より」「みたい」「ばかり」「です・でした」「たり」「そう(です)」, およびすべての補助動詞(「…てくる」「…ている」等)は独立のアクセント単位と認定したが、再考を要するものがあるかもしれない。こうした統語的独立性の弱いアクセント単位は一般にイントネーション的にも独立性が弱いので、付表では「限定の判断等」の欄に「☆」記号を付けた。

(2) 次に、各アクセント単位の「相対的なアクセント実現度」を、筆者の聴覚的判断により「弱化」「非弱化」「判定保留」の3段階で判定した。ここで相対的というのは、直前の非弱化アクセント単位に比べてどうかということである。たとえば、文頭のアクセント単位は話者の使用声域の中で高く発音されることも、低く発音されることもあるが、その文のふたつめのアクセント単位は文頭のものに比べて弱化しているかどうかを判断した。文頭のアクセント単位自体は判断の対象としなかった。

判定結果は稿末の付表に示した。付表ではアクセント単位ごとに3段階それぞれの実現度に該当する話者数を示し(右から2~4列)、全6名のうち5名以上が一致している場合を話者間の共通性が大きい特徴と考え、それを総合的判定として左から2列目の具体的な言語形式の

2) www.praat.org, ここで使用したのは version 5.1.43。

3) 音の上がり目を記号「で、下がり目を」で示すと、ニ「ホ」ン(中高型)、ス「モーキョ」ーカイ(中高型)、ダ「ケ」(尾高型)、ワ(独自のアクセントはなく、ダケワで1単位)。

前に記号で記した。以下ではこの総合的判定にもとづいて考察を進める。アクセント実現度の記号は非弱化を「^」（unicodeで22c0）で、弱化を「˘」（25e1）で表した⁴⁾。

相対的なアクセント実現度（弱化・非弱化）の認定基準： あるアクセント単位が弱化しているという判断は、その単位の冒頭での音の上昇がまったく感じられない、あるいは感じられてもわずかであり、その直前の単位に従属する形で、直前の単位とあわせてひとまとまりの高さの塊（音調句）になっているように聞こえる場合に行う。

たとえば「わたしが」であれば、これを単独で発音した場合にはワからタへの明瞭な上昇が感じられるが、もしそれが文中において全然感じられない発音になっているか、上昇していてもごく小さい場合は、弱化していると判断する。また、「（そのあいだ）ごんは」であれば、ゴが直前のダより一段高くなっていると感じられない場合、あるいは高くなっているにもかかわらずかであるために、「そのあいだごんは」全体でひとまとまりになっていると感じられる場合は弱化と判断する。逆に、ゴでの上昇が大きく、「ごんは」が「そのあいだ」とは別の独立した高さの塊になっていると感じられる場合は、非弱化と判断する。

ただ、弱化か非弱化かの判定が困難な場合も当然ある。そのような場合は無理をせず「判定保留」とした。結果的に判定保留は全体の4%（話者別に見れば2~7%）であった^{5) 6)}。

(3) さらに、その聴覚的判断に大きな誤りがないかどうかを Praat の Edit 画面上の基本周波数曲線で確認し、必要があれば判断を修正した。たとえば、聴覚的には弱化だが、物理的にはアクセント単位内の冒頭に相当大きな上昇（直前が有核アクセントの場合は、めやすとして直前の非弱化単位の山の半分程度）があるという場合は「判断保留」にするなどである。それでも、さらにもう一度聞き直した場合、あるいは他の研究者が判断した場合に認定結果が異なることはありえる。このように、本稿のアクセント実現度のデータには一定の不確定性がある⁷⁾。

(4) 上記の手続きで得られた相対的アクセント実現度の判定結果を、当該アクセント単位の

4) これらの記号は朗読の準備としてテキストを研究する際に、手書きによるイントネーションの指示の書き込みにも便利かということで試みに用いたものである。

5) 冒頭での上昇がまったくなく、直前のアクセント単位と完全に一体化するほど弱化度が大きい場合と、それなりの上昇が感じられ、弱化度がさほど大きくない場合では、生起環境や機能の違いには将来の検討課題とし、本稿では両者を一括し「弱化」として論じる。同様に「非弱化」の程度もさまざまで、冒頭での著しい上昇がある「アクセント強調」の場合もある。これは、後述する「フォーカス」が置かれる際に使われることが多いが、ここでは「非弱化」として扱う。また、「判定保留」としたような発音になるのも、それなりの理由があるためかと思われるが、これについては稿をあらためて論じることにしたい。

6) 相対的なアクセント実現度に関する筆者の聴覚的判断の様相を、拙稿(2012)で用いた4文の合成音声を用いて検討した。すなわち、「ホテルの料金は(9000円でした)」「ホテルに料金は(書かれていませんでした)」(この2文については頭高型アクセントの「ホテルの」が高さ10半音の山になっている場合と5半音の場合の両方)、そして「ホテルの名前は(かいゆう館でした)」「ホテルに名前は(書かれていませんでした)」の4文について「料金」「名前」の高さを段階的に変えて作成した合成音声を聞き、「料金」(頭高型)と「名前」(平板型)のアクセントが弱化しているかしていないか、どちらとも言いがたいかを判断した。1音声につきランダムな順で10回判断を行ったが、結果として「ホテルの・に料金」については「料金」の上昇量が「ホテル」の山の高さの1/4以下であれば安定的に弱化と判断し、2/3以上であれば安定的に非弱化と判断し、その間のものは判断が安定しなかった。「ホテルの・に名前」では、「名前」の上昇量が「ホテル」の山の高さの1/10以下であれば安定的に弱化と判断し、2/3以上であれば安定的に非弱化と判断し、その間のものは判断が安定しないという結果になった。

7) 音響データに直接もつづいた判断を行わなかったのは、非弱化か弱化かの明瞭な境界は音響的にも決めがたいためである。

意味的な役割と対比させながら仮説検証的に分析した。

ここで言う意味的な役割とは、「意味的な限定関係」の有無、および「フォーカス」の有無である。このふたつは、読み上げ文においてアクセント実現度の大小を決める重要な要因であることがわかっている(拙稿 1997, 2003)。本稿ではこれらが物語朗読にも適用できるかどうかを検討する。

意味的な限定関係(拙稿 2008 参照)とは、たとえば「奈良のもみじを見に行く」という文において「奈良の」が「もみじ」の指示対象の範囲を限定しているような関係である。このような場合、限定される側の「もみじを」のアクセントは弱化する。

今あげた「奈良のもみじ」がそうであるように、限定関係は文法的な修飾関係と一致することが多い。しかし、たとえば「奈良の法隆寺を見に行く」「漱石の『坊っちゃん』を読む」では、「奈良の」や「漱石の」は「法隆寺」「坊っちゃん」の指示対象を限定しているわけではなく、所在地や著作者を説明するための補足的な情報である。また、「奈良の」や「漱石の」を省略して「法隆寺を見に行く」「『坊っちゃん』を読む」としても中核的な意味は変わらない。そして、重要なことはこの場合の「法隆寺」や「坊っちゃん」のアクセントはふつつ弱化しないという点である。つまり、アクセントが弱化するかしないかを左右するのは、文法的な修飾関係というよりも、意味的な限定関係であると言う方がよい。

上にあげた例は意味的に限定される側が名詞の場合であるが、動詞の場合も同様に考えることができる。たとえば「去年見た」「じっくり見た」「外から見た」「由美と見た」では「見た」にアクセント弱化が生じるが、ここでは述語が表す作用や様態のありかたが修飾成分によって限定されている。また、「私が見た」「もみじを見た」のような「補充成分+述語」の場合は、述語に対してその動作主や対象等が何であるかを限定する働きを補充成分がしていると考えことで、つまり補充成分が具体的に何であるかについて、可能な成分の集合から一部を限定的に指定しているとするので、やはり意味的限定によるアクセント弱化の例と考えることができる。

なお、「ごんは思いました」のように提題の助詞「は」を持つ文節の直後に述語が来る場合は、上述の基準では2文節に意味的な限定関係があることになるが、先行する方の文節がテーマという語用論的に独特の機能を持つので、以下では別扱いする。

以上の観点から、本資料の各アクセント単位(に対応する名詞や動詞)が、直前の文節から意味的に限定されているかどうかの認定を行った。付表では限定を受けていると判断したアクセント単位を記号○で示している。助詞「は」に後続するものは「は」で示す。

実は、本稿で扱うような物語文では、後続語への意味的な限定を行いながらも、同時に補足的な状況説明になっている表現がよく使われている。たとえば、付表 207-215 の「まるい萩の葉がいちまい大きなほくろみたいへばりついていました」において、「大きな」は「ほくろ」の大きさの程度を限定しているが、状況を説明するための補足的情報でもあり、省略不可能ではない。このような場合は、先行文節の意味解釈において限定と補足のどちらの側面を

重視するかが当該のアクセントを弱化させて読むかどうかの違いに反映されるように思われる。補足の側面を重視する解釈を本稿では仮に「限定的補足」と呼ぶことにする⁸⁾。今の例では6名の話者全員が「ほくろ」のアクセントを弱化させずに言っているが、これは「大きな」の補足性を重視したためと思われる⁹⁾。

一方、**フォーカス**とは、聞き手に対して何をいちばん伝えたいか、何に注目させたいかという伝達欲求度の最高点であり、先行文脈から想定しにくい新情報を表す語句（文節やその一部、あるいは文節連続）、あるいは想定できても他との対比を意識して言う語句などに置かれる¹⁰⁾（詳細は拙稿1997参照）。内語でも同様で、この物語第二部の「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ」なら、兵十の近親者が亡くなったことがわかっている文脈なので、「おっかあ」にフォーカスがある。

読み上げ文では、フォーカスが置かれるアクセント単位は通常それ自身の高低変化を大きくし（つまり、アクセントを強調し）、同時にそれより後の部分の高低変化を抑えて平坦に近く言う。つまり、フォーカスの後のアクセントを弱化させる¹¹⁾。フォーカスがどこにあるかを伝えるためには、フォーカス以降のアクセントを意味的限定関係の有無に関わらず弱化させることが重要である。逆に先行文節からの意味的な限定を受けていても、フォーカスがあれば弱化しない。

一般に物語では、一文の大部分が先行文脈からは想定しにくい新情報になっていることが多いが、その中でも朗読の際に他を抑えて特に伝えたい箇所（語、文節）、つまりフォーカスを置くべき箇所があるのかどうか、もしあるとすればそれはどこなのかという判断は、読み手の解釈に委ねられている場合が少なくないように思われる。物語のじょうずな朗読を難しくしている原因のひとつがこれであろう。

たとえば、この作品の冒頭の「これは私が小さいときに村の茂平というおじいさんから聞いたお話です」は全文が新情報であるが、そのなかで特に注目させたい箇所があるとすれば、まず思いつくのは「茂平」または「おじいさん」であろう。しかし、この時点で聞き手に特に強く伝えておきたいのはそのどちらであるか、あるいはその両方か、それとも「茂平というお

8) この要因の存在はこれまで考えておらず、この物語文の分析を通じて初めて導入したものである。

9) これと似た例として、『桃太郎』の「川上から大きな桃が流れてきました」における「大きな桃」がある。しかし、「桃が」のアクセントは弱めて読むのがふつうである。これは、流れてきたのは単なる桃ではなく、大きなものでないとおかしいということから、「大きな」の限定的側面を重視する解釈をとるのが自然だからと思われる。つまり、このケースは本稿で言う限定的補足ではない。

10) この定義は筆者の独自性の強いものであり、また筆者自身がこれまで考えてきたこととわずかに異なる部分もある。ここではフォーカスと新情報は別物と考えており、「きのうは何を食べたの？-きのうはうなぎを食べた」という対話における「うなぎ」のような場合はフォーカスのある箇所と新情報は一致するが、「どうしたの？-頭が痛いんだ」における「頭が痛いんだ」や、物語の冒頭文のように一文全体が新情報と考えられるような場合は、フォーカスはそのどこか一部分（複数箇所でもよい）にあることもあれば、全体にあることもあると考える。なお、一文全体にフォーカスがある場合も含め、連続する文節全体にフォーカスがある場合は、その部分のアクセントの実現度は内部の意味的限定関係を生かした形で実現されるのがふつうであるが、個々のアクセント単位をすべて際立たせる発音もありうる（拙稿2011参照）。

11) フォーカスがある箇所の音声の際だけを取りあげて「プロミネンス」と呼ぶ慣習も根強くあるが、フォーカスの後の高低変化が目立たないように抑えることがフォーカスを感じさせるために重要である。

じいさん」全体なのかという判断は簡単ではない。この物語ではこのあと「茂平」は登場しないので、「あるおじいさん」ではなくわざわざ「茂平」と言っているのは話に具体性を持たせるためかと考えられる。その意味では「茂平」に重要性がある。しかし、「おじいさん」と言うことで相当昔の話であることをしっかり伝えたいのだとすれば、こちらも重要であることになり、同時に「私が小さいときに」の「小さいとき」も重要であることになるが、次の文の冒頭で「昔は」があるのだからそこまで作者¹²⁾は意図しておらず、単に情報源を提示するための文だという解釈もできよう。

このように、物語の読み手の立場から見たフォーカスのありかは、読み手がその語句の存在意義をどのように理解するか、作者の意図をどう解釈するか、あるいは物語にどのような色づけをして語ろうとするか、どのように後に続けていこうとするか等によって変わりうるものであり、フォーカス位置の選択には読み手に任せられている部分が少なからずある。そして、それによってイントネーションも左右されると考えられる。以上の理由から、付表においてもフォーカス位置は示していない。

(5) 以上述べたのは相対的なアクセント実現度の検討方法であるが、これとあわせて、非弱化和判定したアクセント単位と文頭のアクセント単位のみについて、その高さの最大値をPraatを利用して測定した。そして、そのそれぞれがその話者の使用声域の中で高いか低いかを判定し、意味的な役割等との関係を検討した(以下、「使用声域内での高低」)。使用声域内での高低の判断には、機械的ではあるが四分位数を利用した。すなわち、今述べた高さデータのある話者について高い方から順に並べ替えた場合に、もっとも高い方から1/4までの範囲に属するものをその話者の「高域」、もっとも低い方から1/4までの範囲に属するものを「低域」、それ以外の全データの半数を「中域」とした。図2の2本の横線はそれらの境界を示したものである。

このデータを用いて、各話者の使用声域の広さ、そして物語の進行にともなう声の高さのレベルの変化について検討する。また、文の冒頭が高く始まる場合と著しく低く始まる場合があるが、その実態と理由について検討するための資料とする。

3.3 ポーズ、話速の分析方法

ポーズについては、ごく短いものも含めて聴覚的に有無を判断し、Praatを利用してその持続時間を測定した。測定の都合上、たとえば「川」の直前にポーズがあった場合、冒頭の[k]音の実現に必要な閉鎖の時間はポーズの中に含めている。

ポーズの有無も稿末の付表に示した。付表の最右列が個々のアクセント単位の直後にポーズを置いた話者数を示し、全6名のうち5名以上が一致してポーズを置いているものを話者間の共通性が大きいものと認定して、左から2列目の具体的な言語形式の直後に記号で示した。

12) あるいは、この作品の場合は草稿の冒頭部に対して大幅な短縮を行ったと思われる初出誌の編集者(鈴木三重吉)。半田市教育委員会(編)(1994)所収の自筆原稿参照。

句点でのポーズを音楽の4分休符ふたつで、非句点でのものを4分休符ひとつで表している。

また、発話の経過時間からポーズ量を差し引き、それをモーラ数で除することで、発話速度を計算した。

4. 結果

4.1 文末・文節末の音調

文末・文節末の音調として特に述べるべき特徴はない。ほとんどが平調である。平調とは、語のアクセントによる高低変化をそのまま生かすだけで、文末で独自の高さの動きはないものである。音として平坦であるという意味ではなく、実際には下降傾向を示す（下降の大きさは文末のアクセント型しだいで異なる）。このように、文末や文節末に特別なイントネーションを使わないのが熟練したプロの朗読と言ってよいと思う。

それでも、平調以外が使われていることもある。それぞれ1名の話者だけの使用例であるが、気がついた範囲では「おとのさま[↑]が(#24)」「おっかけて[↑]は(#389)」「(川下)方へ[↑]と(#157-158)」「草の葉の上[↑]に(#401-403)」に最後の助詞に強調型上昇調(↑)の使用例があり、「ひたりなが[↑]ら(#195)」には最後のモーラでの上昇下降調(↑↓)と思われる例があった。

終助詞は本稿の検討範囲では「兵十だ^な(#183)」の「な」のみである。5名の話者がこれを強調型上昇調で言っているが、1名は強調型上昇調か疑問型上昇調か判定困難であった。

4.2 アクセントの相対的実現度

3.2節(2)で説明した方法で認定したアクセントの非弱化・弱化的割合を話者別に図1に示す。他の話者に比べて非弱化の割合が高い話者(○印)がいるが、この話者は純首都圏生育ではなく、そのことが非弱化率の高さの原因になっている可能性はある。

次に、話者間で一致度の高い特徴に注目する。全6名のうち5名以上について判定の一致が見られたアクセント単位は全体の78%ある。しかし、例を個別に見ると、一致のしかたはアクセント単位の性格によって異なっている。そこで、3.2節(4)で述べた観点から文内における各アクセント単位を意味的な性格で分け、それぞれで5名以上が一致したアクセント単位の数を表1に示す。

図1 話者別のアクセント実現度の割合

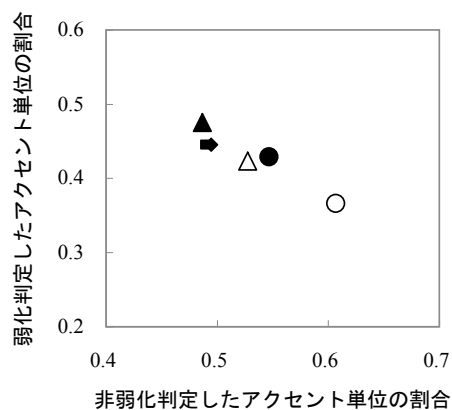


表1 アクセントの相対的実現度の分類（アクセント単位数）

アクセント単位の種類	(5名以上が) 非弱化	(5名以上について) 判定保留	(5名以上が) 弱化
意味的に限定されていないもの	91	18	1
意味的に限定されているもの	39	59	80
統語的独立性の弱いもの	0	2	47
提題の「は」に後続するもの	27	2	0

表1の1段目を見ると、直前文節から意味的に限定されていないアクセント単位は、判定保留のものが2割ほどあるが、それを除けばほぼすべてが5名以上非弱化と判定されていることがわかる。唯一、5名以上で弱化の判定がされたのは「うなぎやきすを(#259-260)」の「きすを」であるが、これは拙稿(1997, p.188)で述べたような、並列されていて直前の語と意味的な一体感のある語はアクセントが弱化する現象である。これを除けば本資料では、直前の文節から意味的に限定されないアクセント単位は弱化しない傾向が強い。

表の3段目の統語的独立性の弱いものとは、助詞・助動詞で1アクセント単位をなすと認定したものと補助動詞である。これらは弱化する。一方、表の最下段に示した提題の「は」に後続するものは弱化しない。

以上の3つのタイプではアクセント単位の意味的な性格と実現度に明瞭な対応関係があると言ってよいだろう。しかし、表2段目に示したような、直前の文節から意味的に限定されているアクセント単位の場合はそうではない。これらは3.2節の(4)で説明した原則からすれば弱化するはずである。しかし、5名以上が弱化という判定がされた割合は全体の45%にすぎない。話者間の一致度が低く(4名以下)、弱化とも非弱化とも言えないものも1/3程度ある。特に問題なのは5名以上で非弱化と判定された39例(22%)である。

しかし、この非弱化例39について検討した結果、そのほとんどは以下の3つの要因による例外として説明できそうであることがわかった。

(1) 意味的限定関係の連続

この要因はすでに拙稿(1997, p.189)で指摘したものである。NHKの教本類でよく取りあげ「緊急の措置をとる必要があると言っています」という文で言えば¹³⁾、意味的限定関係がずっと連続しているため、先述の原理から言えば最初以外はすべてアクセントを弱化させることになる。しかし実際にすべてを弱化させるのはなかなか難しい。単に「緊急の措置です」と言うのと同じ調子で「措置を」の内部で一挙に下げてしまうと、その後をずっと低い声域でほとんど平坦に言わざるをえないが、それは生理的に苦しく感じるし、その結果、内容も伝わりにくくなってしまふおそれがある。熟練したアナウンサーなら、「措置」で一挙に下げるのではなく、「措置」「とる」「ある」でそれぞれ少しずつ下げるように調節するであろうが、それは簡単で

13) たとえば『NHK CD 朗読にチャレンジ』など。これに関する考察として杉原満(2012)がある。

はなく、意識的な訓練が必要である。

本資料の場合、4つ以上の文節に意味的限定が連続するケースでは、途中のどこかを弱化させないで言う傾向がある。これに該当するかと思われるのは、「百姓家の裏手につるしてある
Aとんがらしを (#71-75)」「村の小川の A堤まで出てきました (#114-119)」「ほら穴の近くの Aはん
の木の下で (#381-385)」「穴のそとの A草の葉の上に (#399-403)」である。ただし最初の例は、後
に述べるようなフォーカスを置いたための非弱化とも考えうる。

(2) 限定的補足

すでに3.2節(4)で触れたが、物語文では、後続語への意味的な限定をしながら同時に補足的な状況説明をするための文節がよく使われており、そうした文節について補足的な側面を重視して読む「限定的補足」の場合はアクセントを弱化させないと思われる。

そのことで弱化が阻止されたと考えられるものに、「[ごんは] ひとりぼっちの A小狐で (#39-40)」「大きな Aほくらみたいに (#211-213)」「くさった A木ぎれなどが (#234-236)」「ふとい Aうなぎの [腹や] (#248-250)」「大きな Aきすの [腹でした] (#251-253)」「ぬるぬると Aすべりぬけるので (#334-335)」がある¹⁴⁾。文脈から考えると、限定する側の文節を省略することができそうなものばかりである。また、「外へも A出られなくて (#91-93)」では、「(ほら穴から) 出る」と言えばふつうは「外に」であるから、「外へも」は省略は困難に感じられるものの、実質的な意味的限定の働きはほとんどなく補足説明的である¹⁵⁾。「あたりの Aすすきの [穂にはまだ雨のしずくが光っていました] (#120-121)」では、状況から考えると雨のしずくが残っていたのは「あたりの」穂だけではないはずなので、「あたりの」の実質的な意味的限定の働きはほとんどない。ここでは、「あたりの」は「そのあたりにはすすきがたくさん生えていたが」という状況説明的な補足の語句であろう。

(3) フォーカス

やはり3.2節の(4)で述べたように、読み上げ文においては、先行文節から意味的な限定を受けていても、フォーカスがあればそのアクセントは弱化せず、その後が弱化する。そして物語文では、どこにフォーカスを置くかが読み手による解釈に委ねられる部分がある。

本資料ではフォーカスのために弱化が妨げられたと考えられる例が相当数あった。その多くを文末の述語動詞が占める。文末の述語動詞34例のうち話者5名以上で非弱化と判定されたものが14例(41%)あるのに対し、非文末(節末)の述語動詞23例のうち話者5名以上で非弱化と判定されたものは3例(13%)と少なく、非弱化率が異なる(いずれも、提題の「は」に後続する場合は除く)。典型例をあげると、「そこからじっと Aのぞいてみました (#180-182)」「ごんの首へ Aまきつきました (#352-354)」「ごんの首にまきついたら Aはなれませんか (#370-373)」である。こ

14) 「大きな Aほくらみたいに」を除き、これらの例では文節連続全体にフォーカスがあると考えられるが、そうした場合のアクセントの実現度は内部での意味的限定関係を生かした形で実現されるのがふつうである。注10の後半参照。
15) 「出られない」のアクセントが弱化しないのは、否定形であるためにフォーカスを置いたという理由もあろう。拙稿(1997, p.182)で述べた要因である。

うした例では「それで結局どうなったのか」が伝えたい中心点、つまりフォーカスになるために、文末の動詞のアクセントが弱化しないものと思われる。ただし、内容の解釈のしかた次第ではフォーカスの位置が変わり、それによってイントネーションも変わることになる。

フォーカスで説明できるもうひとつの類型として「○○という△○○」がある。「中山さまという△おとのさまが(#22-24)」「ごん狐という△狐が(#34-36)」「はりきりという△網を(#198-200)」が典型例であるが、それぞれ「おとのさま」「狐」「網」を聞き手に特に注目させたいと考えての発音かと思われる。ただし、同じ形式でも「中山という△ところに(#16-18)」の場合は「ところ」は特に注目させたい箇所ではない。

また、「わたしが△小さいときに(#2-4)」「水が△すくないのですが(#130-132)」の非弱化も聞き手に注目させたいという気持ちのためかと思われる(前者については3.2節(4)の次末段落の議論参照)。「ある△秋のことでした(#82-5)」の例もフォーカスで説明できる。

本資料において、限定されているのに非弱化と判定されたケースは、以上の3要因でほとんど説明できる。残るのは「菜種がらの△ほしてあるのへ[火をつけたり](#65-7)」と「川べりの△すすきや[△萩の株が](#145-6)」である。後者は「川べりの」が意味的に限定しているのが「すすきや萩の株」というやや長い部分なので、一度「すすきや」で言い直したための非弱化という解釈もできよう。しかし前者の「ほして」の非弱化を意味の観点から解釈するのはむずかしそうである。ただ、実は初出の『赤い鳥』版でも全集版でも「菜種がらの、ほしてあるのへ」と読点が打たれている。本稿では読点との関係はあえて考えないようにしたが、熟練した話者の場合でも無視できないのかもしれない¹⁶⁾。

4.3 使用声域

図2の6枚のパネルは、話者ごとの使用声域の特徴を見るために、非弱化アクセント単位と文頭のアクセント単位の高さについて、その最大値を時間軸に沿って示したものである。縦軸が高さを表すが、目盛の数値は50Hzを基準とし、そこからの隔たりを半音値で示したものである¹⁷⁾。

この図を見ると、使用声域の広さが相対的に大きい話者と小さい話者があることがわかる。また、最後の方で(250秒あたり以降で、ごんのいたずらが兵十に見つかり、逃げてゆく場面)高い声域を多用する話者1, 5と、そうでない話者があることがわかる。ただ、ここで高い声を多用する話者でも、いちばん最後の部分では(「ごんはほっとして...」)、中間的なレベルに戻っている。つまり、物語における緊迫と弛緩を高さのレベルで実現する話者(朗読法)もあるが、そうではない話者(朗読法)もあるということである。

16) 別の意味で読点の存在が読み方に明かな影響を与えている箇所もある。注18参照。

17) 12半音が1オクターブであるから、12半音大きければHz値では倍になるということである。つまり、目盛に示した値が12stなら50Hzの倍である100Hzに相当し、24stならその倍の200Hz、36stならさらにその倍の400Hzに相当する。

4.4 使用声域内での高低

どの話者にもよく聞かれるのが、文の最初のアクセント単位を非常に低く抑えた発音である。典型的なのは「ごんは見つからないようにそうっと…(#171)」における「ごんは」のような場合で、物語の途中で提題の「は」を伴う文節である。こうした発音は、短文の読み上げ時はほとんどあられわれず、自発発話にもあまり出てこないように思えるが、文芸作品の朗読ではよく聞かれる。

本資料の文頭アクセント単位 39 例についての 6 名の使用声域の合計数を見ると、高域に属する発音が 69、中域が 93、低域が 72 であった。本稿での声域の定義からすれば (3.2 節(5)参照)、高域、中域、低域の割合は全体としては 1:2:1 であるから、それに比べると文頭では中域が少なく、高域と低域に偏っている。

「ごんは」は文頭で 9 回使われているが、6 名の使用声域の合計は高域が 8、中域が 20、低域が 26 であった。これを含めて文頭のアクセント単位が提題の「は」を含む 17 の場合を見ると、使用声域の合計は高域が 20、中域が 44、低域が 38 であり、それ以外の文頭では高域が 40、中域が 49、低域が 34 である。つまり、文頭というだけでなく、同時に文のテーマになっている文節は低く抑えて発音する傾向が確かにあるようだ (対比の「は」の例はない)。

「ごんは」の場合は話者間の一致度が高いケースはない。これは、文頭のテーマ文節の抑えは規則というべきものではなく、読み手の選択による任意の発音法であることを示すものと思われる。筆者はかつて「雄治は飲み物を一杯だけ頼んだ」という単独文について、文頭のテーマ文節の高さの抑えがどのようなイメージを喚起するかについて、合成音声を用いた聴取調査を行ったことがある (拙稿 2010)。その結果、文頭の「雄治は」が後続の「飲み物を」と同じ高さの場合は、物語冒頭だとか明るいという印象が持たれ、低く抑えると暗い印象または雄治への思い入れが感じられ、同時に物語の途中だと感じられるようであった。つまり、文頭のテーマの高さを抑える発音には、情報としての新旧という言語学的な要素と、テーマへの思い入れや共感というような、解釈あるいは演技としての要素が含まれており、後者が本資料における話者間のふるまいの不一致の原因かと思われる。

低域での発音について、5 名以上が低域を使ったのは資料全体で 9 例のみで、あまり話者間の一致がないことがわかる。それらは「そして (#50)、しゃがんで (#96)、はい出ました (#103)、あたりの (#120)、すすきの (#121)、光って (#126)、もまれて (#154)、歩きよって (#178)、顔の (#205)」である。多くは文中の被限定文節である。その例外は、ひとつは「そして (#50)」だが、これは文頭であるが情報量のほとんどない文節であるためとして理解できる。もうひとつの例外は「あたりのすすきの [穂には] (#120-121)」であるが、これはここを含む文全体が低めに抑えられている。この文は全文が新情報ではあるが単なる情景描写であり、『NHK CD 新アナウンス教室・アナウンス編』(p.24)で言う『『意味の軽い文』は(全体の)調子が低めになる』に相当するものであろう。

一方、5名以上が高域を使ったのは24例で、「茂平(#6)、少し(#30)、ごん狐(#34)、きんきん(#110)、ふと(#162)、川の(#164)、腰の(#191)、しばらくすると(#216)、袋の(#221)、ところどころ(#241)、白い(#242)、きらきら(#244)、きすの(#252)、何を(#281)、ぼんぼん(#316)、手では(#336)、キュッ(#350)、その(#355)、うわあ(#359)、ぬすと狐め(#360)、びっくりして(#363)、ごんの(#370)、いっしょうけんめいに(#378)、はんの(#383)」である。特徴として、擬音語・擬態語が高域で発音されていることがわかる。

4.5 ポーズの位置・量と話速

付表を見ると、句点ではどの話者もかならずポーズを置いているが(4分休符ふたつで示している)、それ以外の箇所での挿入数の合計は話者によって81から98まで差がある。しかし、この表からはわからないが、実はポーズの数よりも話者間の差が目立つのは、長短のポーズの使いわけ方とポーズの総量である。

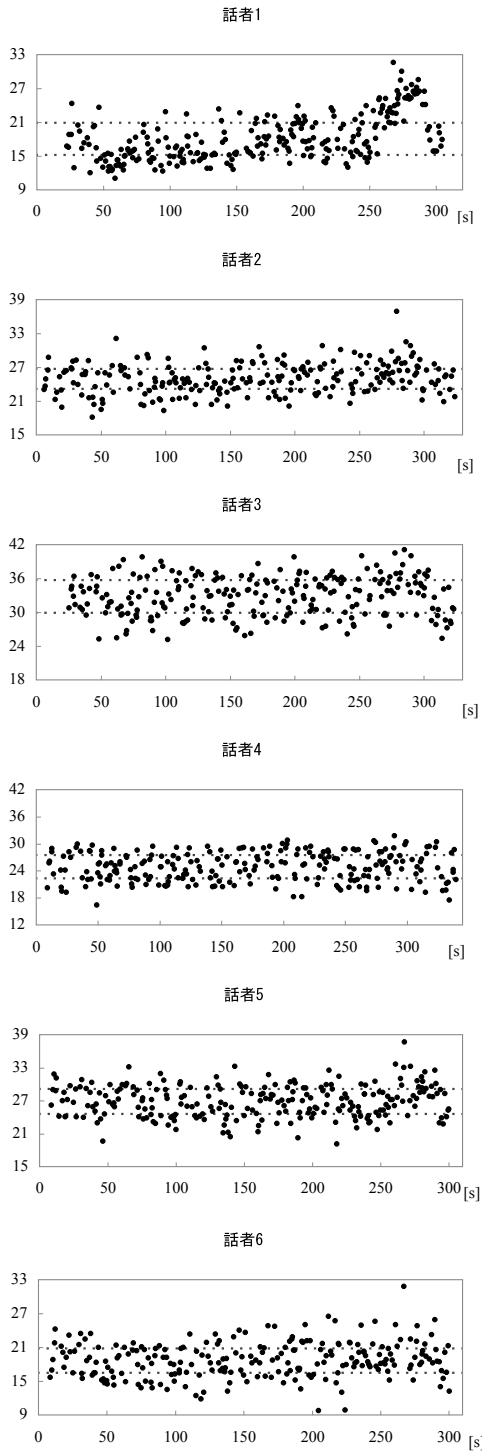


図2 非弱化および文頭アクセント単位のF0最大値時間分布 (単位: 秒)

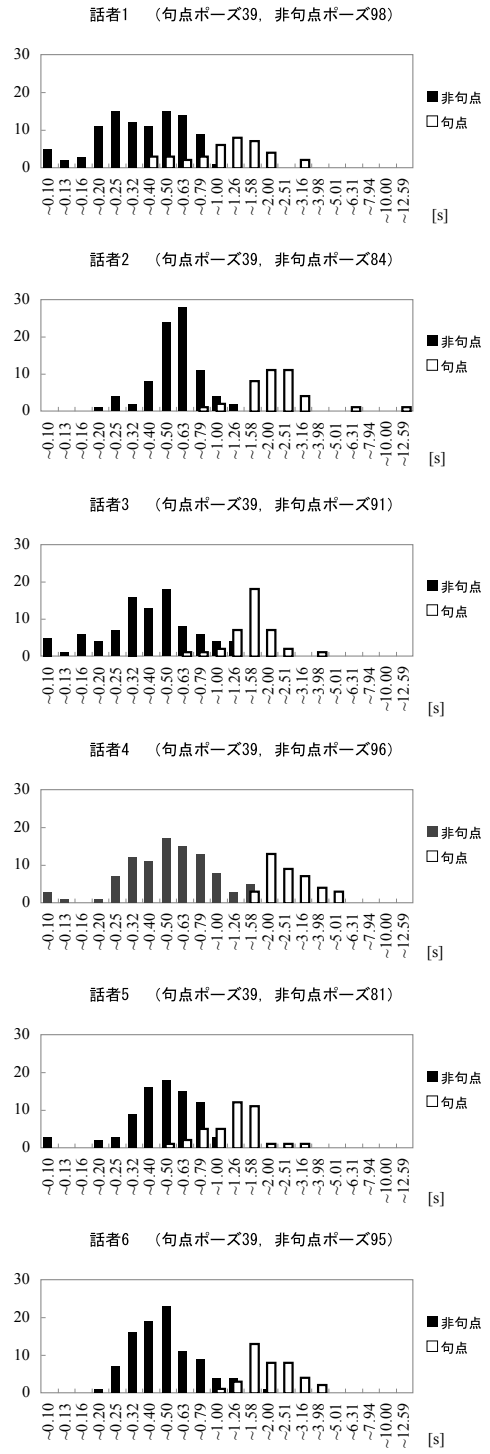


図3 ポーズ長の分布 (単位: 秒)

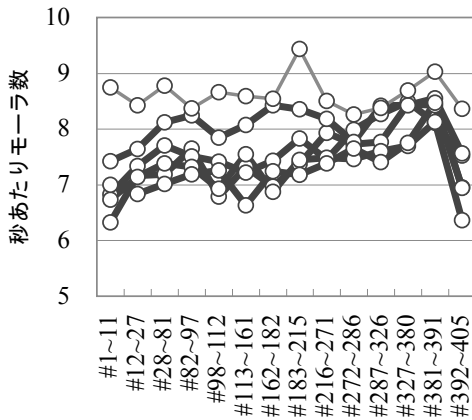


図4 話者別の段落ごとの話速

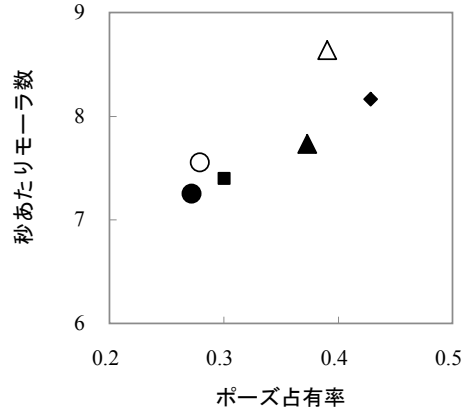


図5 話者別の話速とポーズ占有率

図3に、話者ごとのポーズ長の度数分布を示す。長さの単位は秒であるが、対数尺度で等間隔になる形で示している。句点でのポーズとそれ以外のポーズを分けている¹⁸⁾。

この図から、ポーズの使い方には話者によってかなり大きな違いがあることがわかる。どの話者でも句点でのポーズはそれ以外のポーズより平均的には長く、この2種類を長さで発音し分けているが、両者の差が比較的小さく範囲の重なりがめだつ話者もある。また0.2秒に満たないようなごく短いポーズの多さが目立つ話者と、逆に句点でのポーズの長さが目立つ話者もある。話者1は句点以外でのポーズの長短を0.16～0.8秒あたりの範囲で比較的主眼なく使い分けているが、話者2は0.4～0.6秒あたりに集中させている。こうした特徴は話者らしさを感じさせる要因になっているのではないと思われる。

提題の「は」の後にはポーズを置きやすいと思われるが、本資料では約半数の頻度であった。ポーズの総量についてはこの節の最後で述べる。

次に、段落ごとの話速(テンポ)の変化を秒あたりのモーラ数で図4に示す。これは各段落に含まれるモーラ数をポーズを除く実発話時間で除した値である。全14の段落のくぎりは『赤い鳥』版および『校定 新美南吉全集』にしたがう。

各段落で構成モーラが異なるため、段落間の厳密な比較はできない。しかし、多くの話者は冒頭から最後の方にかけて徐々にテンポを上げ、最終段落でテンポを落としている様子が図から読み取れる。最終段落の扱いは4.1節で見た使用声域と同じであり、これは話の内容として緊張が緩和されたことを声の高さとテンポで表現しているものと解釈できる。

18) 句点でのポーズの長さは、読み直しによる部分的差しかえ等のために編集段階で調節している可能性があるため、ここでは句点のポーズについてはあまり細かい分析は行わない。また、よく指摘されているとおり、読点とポーズには直接の対応関係はない。使用テキストによっても読点の付け方が異なる。本稿では読点は検討の対象としない。しかし、読点が読み方を明らかに左右している場合がある、それは「とんがらしをむしりっていったり(#75-78)」である。『赤い鳥』版でも全集版でも「いったり」の直前に読点が打たれている。これだと「いったり」を「炒ったり」とも解釈できてしまう。実際、2名の話者はこれを中大型アクセントの「行ったり」ではなく、「炒ったり」の意味で頭高型のアクセントで発音している。作者の草稿では「唐辛子をとって来たり」なので、補助動詞として解釈するのが自然であろう。

ただ、話者6だけは、最終段落でテンポを落とす点は他の話者と同じだが、そこに至るまでは冒頭からずっとほぼ同じテンポで読んでいる。この特徴がどのような聴覚印象を与えているのかについて今後検討したい。

図5は、話者ごとの平均話速とポーズの総量の関係である。平均話速は物語第一部全体のモーラ数をポーズを除いた実発話時間で除した値で示し、ポーズの総量は物語第一部全体に占めるポーズの継続時間合計の割合、すなわちポーズ占有率で示している。平均話速は話者によって7.3から8.6まで、ポーズ占有率は27%から43%までばらつく。したがって、杉藤(1996, p.78)のように1名の話者の分析結果にもとづいてポーズ占有率を素人と熟練者の違いの指標として考えるのは妥当ではないと思われる。

また、この図を見れば明らかなように、テンポが速い話者はポーズ占有率が高く、テンポが遅い話者はポーズ占有率が低い傾向が顕著である。つまり、相対的に早口であればポーズを長めにとっているということである。これは相対的に早口でも聞きやすさを維持するための方策と考えられる¹⁹⁾。

5. まとめと総合的考察

複数の熟練したプロによる『ごん狐』の朗読音声に共通に見られるイントネーションとポーズの特徴を分析した結果、以下のことがわかった。

- ・分析の中心的な対象としたアクセントの実現度については、(1) 直前の文節から意味的に限定されないアクセント単位は弱化しない(並列されていて直前の語と意味的に一体化している場合を除く)；(2) 助詞・助動詞や補助動詞のアクセントは弱化する；(3) 提題の助詞「は」に後続するアクセント単位は弱化しない；(4) 直前の文節から意味的に限定されるアクセント単位は弱化する場合としない場合があるが、弱化しないものは「意味的限定関係の連続」「限定的補足」「フォーカス」という3要因による例外として説明できる。今回の検討の結果、「限定的補足」の概念をあらたに導入する必要性が明らかになったが、短文の読み上げ音声の分析から得られたアクセント実現度に関する理論は朗読音声にも適用できる。
- ・文末・文節末はほとんどが平調であり、特別なイントネーションを使わないのが熟練したプロの朗読と言えそうである。
- ・物語における緊迫と弛緩を高さのレベルとテンポで実現する話者(朗読法)と、そうではない話者(朗読法)がある。
- ・文頭で文のテーマになっている文節は低く抑えて発音する傾向があるが、これは話み手の選択による任意の発音法と思われる。
- ・擬音語・擬態語は高い声域で発音されている。

19) そうした方策の存在については杉藤(1996)も述べているが、比較的最近の報告として鈴木淳也他(2005)参照。

- ・ポーズの使い方には熟練したプロでもかなり大きな個人差があり、話者らしさを感じさせる要因になっているのではないと思われる。
- ・テンポの速い話者と遅い話者があり、相対的に早口であればポーズを長めにとっている。これは聞きやすさを維持するための方策と考えられる。

読み手の立場で考えると、じょうずな朗読を難しくしている原因として、ひとつの文のイントネーションは文法的な構造だけでは決まらず複数の可能性があり、そのどれを選ぶかは文内の個々の話の意味的な位置づけをどのように考えるかshidaidoということがある。まず、文のどこをいちばん伝えたいか、何に注目させようとして読むか、つまりフォーカスをどこに置くかが内容の解釈次第で異なることがある。その結果、発音として個々のアクセントの実現度をどうするかも変わる。フォーカスがある箇所はアクセントを通常は強調し、それ以後を弱体化させるから、フォーカスの位置が変われば文全体のイントネーションが大きく変わる(4.2節(3))。また、直前の文節から意味的限定と意味的補足を同時に受ける場合も、そのどちらの側面を重視するかでアクセントを弱体化させるかさせないかが決まるように思われる(4.2節(2))。意味的限定関係が連続する場合も、個々のアクセントを弱体化させるかさせないかには一定の自由度がある(4.2節(1))。こうした理由があるために、一般的に物語文のイントネーションは一意的には定まらない。内容にふさわしいと読み手が考えるイントネーションで朗読するためには、フォーカスをどこに置くか、意味的限定や補足の関係がどうなっているかをよく研究する必要があるということになる。

付表では、アクセント弱化の記号は話者6名のうち5名以上の発音が一致した場合に付けてある。したがって、記号が付いているのは解釈の余地があまりない箇所と言えよう。逆に、記号が付いていないのは自由度が高い箇所であり、アクセントを弱体化させて読むかどうかの話し手の解釈に委ねられていて、個性が発揮しやすい箇所であると言えよう。

引用文献

- 明石圭佑・榎津秀次・三崎貴裕・古宮誠一(2007)「物語朗読における句点でのポーズ時間長と聞き手による状況モデル構築との関係について」『電子情報通信学会技術研究報告HIP』107(117), 111-116.
- 大野眞男・三輪穰二(1996)「朗読におけるポーズと発話速度-『相対ポーズ値』の提唱-」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』6, 45-58.
- 郡史郎(1997)「日本語のイントネーション-型と機能」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, 169-202.
- 郡史郎(2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店, 109-131.

- 郡史郎 (2008) 「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』12(1), 34-53.
- 郡史郎 (2010) 「イントネーションの構成要素としての音調句: その形態, 形成要因と機能」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』21-26 (シンポジウム「イントネーション研究の現在」).
- 郡史郎 (2011) 「東京方言における広いフォーカスの音声的特徴」『音声言語の研究 5』(大阪大学大学院言語文化研究科) 13-20.
- 郡史郎 (2012) 「東京方言における意味的限定と非限定を区別する音声的基準-短文読み上げ資料と合成音聴取実験によるアクセント実現度の検討-」『言語文化研究』38, 1-22.
- 小森政嗣・長岡千賀・中村敏枝 (1999) 「スピーチにおけるちょうど良い『間』の長さ」『ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集 1999』393-398.
- 白勢彩子 (2011) 「朗読音声のイントネーションの定性的比較」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』1, 62, 63-68.
- 杉藤美代子 (1996) 『声にだして読もう! -朗読を科学する-』明治書院.
- 杉原満 (2012) 「『緊急の措置をとる必要があると言っています』再考~言語学から見るNHKアナウンサーのイントネーション論~」『放送研究と調査』62(1), 56-72.
- 鈴木淳也・佐川雄二・田中敏光・杉江昇・下山宏 (2005) 「聞きやすい音声におけるポーズ長と話速の関係の分析」『名城大学総合研究所総合学術研究論文集』4, 27-36.
- 中村敏枝 (1987) 「スピーチの内容と『間(ま)』の関係」『日本心理学会第61回大会発表論文集』691.
- 新美南吉 (1932) 「ごん狐(童話)」『赤い鳥』(後期) 3, 1月号, 16-27. 『校定 新美南吉全集 第三巻』(大日本図書, 1980年)に旧字旧かなのまま収録.
- 半田市教育委員会 (編) (1994) 「新編 新美南吉代表作集」半田市教育委員会.
- 山田彩子 (2007) 「朗読音声のイントネーション-聞き手・作中人物との関係を中心に-」『佛教大学大学院紀要』35, 53-67.
- 山田彩子 (2009) 「『朗読者の意図』と『聞き手の評価』-イントネーションを中心に-」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』37, 125-139.
- 余郷裕次 (1992) 「小学生の音読・朗読の実態(1)-パソコンによる間(ポーズ)の分析-」『学大國文』(大阪教育大学) 35, 17-28.
- 『NHKCD「新アナウンス教室・アナウンス編」』NHK サービスセンター, 2000年.
- 『NHKCD『朗読にチャレンジ!』~「NHKアナウンサーのはなすきくよむ」より』NHK サービスセンター, 2006年.
- 『日本音声製作者名鑑 2007』小学館, 2007年.
- 『日本タレント名鑑 2002年版』VIPタイムズ社, 2002年.

54	村へ	○	3	1	2	0
55	出て	○	3	1	2	0
56	くきて ？	☆			6	5
57	△いたずら		6			0
58	ばかり	☆	4		2	0
59	くしました。##	○			6	6
60	はたけへ					0
61	入って	○	1	1	4	1
62	△芋を		6			0
63	△ほりちらし	○	6			0
64	くたり ？	☆			6	6
65	△菜種がらの		6			0
66	△ほして	○	5		1	0
67	くあるのへ	☆		1	5	0
68	△火を		6			0
69	くつけ	○	1		5	0
70	くたり ？	☆			6	6
71	△百姓家の		6			0
72	裏手に	○	3		3	0
73	つるして	○	3		3	4
74	くある	☆			6	0
75	△とんがらしを	○	6			0
76	△むしりとって	○	5	1		2
77	いっ	☆	3		3	0
78	くたり ？	☆			6	5
79	△いろんな		5		1	0
80	ことを	○	2		4	0
81	くしました。##	○			6	6
82	ある					2
83	△秋の	○	6			0
84	くこと	○			6	0
85	くでした。##	☆			6	6
86	にさんにち					0
87	△雨が		6			0
88	ふりつづいた	○	4	1	1	0
89	その		3	1	2	0
90	くあいだ ？	○			6	6
91	△ごんは		5		1	3
92	△外へも	は	5		1	0
93	△出られなくて ？	○	5		1	6
94	△穴の		5		1	0
95	く中に	○			6	0
96	しゃがんで	○	4	1	1	0
97	くいました。##	☆			6	6
98	雨が					0
99	くあがると ？	○	1		5	5
100	ごんは		2		4	1
101	△ほっとして	は	6			3
102	△穴から		5		1	0
103	△はい出ました。##	○	6			6
104	空は					0
105	△からっと		6			0
106	く晴れて	○		1	5	0
107	くいて ？	☆			6	6
108	△もずの		5	1		0
109	く声が	○			6	1
110	△きんきん		6			0
111	ひびいて	○	2	2	2	0
112	くいました。##	☆			6	6

113	ごんは ？					6
114	△村の	は	6			0
115	小川の	○	4		2	0
116	△堤	○	6			0
117	くまで	☆				6
118	出て	○	1	2	3	0
119	くきました。##	☆				6
120	あたりの					0
121	△すすきの	○	6			0
122	く穂には ？	○				6
123	△まだ	は	5		1	1
124	△雨の		6			0
125	しずくが	○	4	1	1	0
126	△光って	○	5	1		0
127	くいました。##	☆				6
128	川は					3
129	△いつもは	は	6			0
130	△水が		6			0
131	△すくないの	○	5		1	0
132	くですが ？	☆				6
133	△三日もの		6			1
134	く雨で ？	○		1	5	6
135	水が		3	1	2	0
136	△どっと		6			0
137	くまして	○	1		5	0
138	くいました。##	☆				6
139	ただの					0
140	くときは	○	1		5	1
141	△水に	は	6			0
142	くつかる	○	1		5	0
143	くことの	○				6
144	くない ？	○				6
145	△川べりの		5		1	0
146	△すすきや ？	○	5		1	5
147	△秋の		6			0
148	株が ？	○		2	4	6
149	△黄いろく		6			0
150	にごった	○	3		3	0
151	く水に	○		1	5	2
152	△横だおしに		6			0
153	くなって	☆				6
154	△もまれて	○	6			0
155	くいます。##	☆				6
156	ごんは					3
157	△川下の	は	6			0
158	く方へと ？	○				6
159	△ぬかるみ道を		6			2
160	△歩いて	○	6			0
161	くいきました。##	☆				6
162	ふと					0
163	く見ると ？	○				6
164	△川の		6			0
165	く中に	○				6
166	△人が		6			0
167	くいて	○				6
168	△何か		6			0
169	△やって	○	6			0
170	くいます。##	☆				6

171	ごんは				1
172	△ 見つからない	は	6		0
173	∪ ように	○		6	3
174	△ そうっと		6		1
175	草の		3	2	1
176	深い	○	4		2
177	∪ ところへ	○		6	2
178	歩きよって ？	○	4	1	1
179	△ そこから		5	1	0
180	△ じっと		6		1
181	△ のぞいて	○	5		1
182	∪ みました。##	☆		6	6
183	「兵十だな」？				6
184	とごんは		4	2	2
185	思いました。##	は	1	1	4
186	兵十は ？				5
187	△ ぼろぼろの	は	6		0
188	△ 黒い		6		0
189	∪ きものを	○		1	5
190	まくし上げて ？	○	4	1	1
191	△ 腰の		6		0
192	∪ ところ	○		6	0
193	∪ まで	☆		6	0
194	△ 水に		5	1	0
195	∪ ひたりながら ？	○		1	5
196	△ 魚を		5	1	0
197	∪ とる	○		6	4
198	△ はりきり		6		0
199	∪ という	☆		6	4
200	△ 網を	○	6		0
201	ゆずぶって	○	4	2	0
202	∪ みました。##	☆		6	6
203	はちまきを				0
204	∪ した	○		6	0
205	顔の	○	3	3	0
206	横っように ？	○	2	1	3
207	△ まるい		6		0
208	△ 萩の		5	1	0
209	∪ 葉が	○		6	0
210	いちまい ？	○	1	2	3
211	△ 大きな		6		0
212	△ ほくろ	○	6		0
213	∪ みたいに	☆		6	0
214	へばりついて	○	4	2	0
215	∪ みました。##	☆		6	6
216	しばらくすると				2
217	兵十は ？		2	2	2
218	△ はりきり網の	は	5	1	0
219	△ いちばん		6		0
220	∪ うしろの ？	○	1		5
221	△ 袋の		6		0
222	∪ ように	○		6	0
223	∪ なった	○		6	0
224	∪ ところを ？	○		6	6
225	△ 水の		6		0
226	∪ 中から	○		6	0
227	△ 持ち上げました。##	○	5	1	6
228	その				0
229	∪ 中には ？	○		6	6

230	△ 芝の	は	5	1	0
231	∪ 根や ？	○	1		5
232	△ 草の		6		1
233	∪ 葉や ？	○	1		5
234	△ くさった		6		0
235	△ 木ぎれ	○	6		0
236	∪ などが ？	☆		6	5
237	△ ごちゃごちゃ		6		0
238	はいって	○	4	1	1
239	∪ いましたが ？	☆		6	6
240	△ でも		6		1
241	△ とおどころ ？		6		5
242	△ 白い		6		0
243	∪ ものが	○		6	0
244	△ きらきら		6		0
245	光って	○	2	1	3
246	∪ います。##	☆		6	6
247	それは ？				5
248	△ ふとい	は	5	1	0
249	△ うなぎの	○	6		0
250	腹や ？	○	2		4
251	△ 大きな		6		0
252	△ きすの	○	6		0
253	∪ 腹	○	1		5
254	∪ でした。##	☆		6	6
255	兵十は				2
256	△ びくの	は	6		0
257	∪ 中へ ？	○		6	5
258	△ その		5	1	2
259	△ うなぎや	○	5	1	0
260	∪ きすを ？		1	5	5
261	△ ごみと		6		0
262	∪ いっしょに	○		6	1
263	△ ぶちごみました。##	○	5	1	6
264	そして				2
265	また		2	4	2
266	袋の		3	3	0
267	∪ 口を	○		6	0
268	∪ しばって ？	○	1	5	6
269	水の		4	2	0
270	∪ 中へ	○		6	1
271	入れました。##	○		2	4
272	兵十は				1
273	それから ？	は	3	1	2
274	△ びくを		6		0
275	∪ もって	○	1	5	1
276	△ 川から		6		1
277	∪ あがり ？	○	1	5	6
278	△ びくを		6		0
279	△ 土手に		6		1
280	置いといて ？	○	2	4	6
281	△ 何を		6		0
282	∪ さがしにか ？	○		6	5
283	△ 川上の		6		0
284	∪ 方へ	○		1	5
285	△ かけて	○	6		0
286	∪ いきました。##	☆		6	6
287	兵十が				0
288	いなく	○	2	1	3

289	ゝ なると ？	☆			6	5
290	ごんは		2	2	2	3
291	△ びよいと	は	6			0
292	草の		4		2	0
293	ゝ 中から	○			6	0
294	ゝ とび出して ？	○		1	5	6
295	△ びくの		6			0
296	ゝ そばへ	○			6	0
297	△ かけつけました。##	○	6			6
298	ちよいと					2
299	△ いたずらが		5		1	0
300	したく	○	2		4	0
301	ゝ なったの	☆			6	0
302	ゝ です。##	☆		1	5	6
303	ごんは					2
304	△ びくの	は	6			0
305	ゝ 中の	○			6	0
306	魚を	○	4	1	1	0
307	つかみ出しては ？	○	4	1	1	6
308	△ はりきり網の		6			0
309	かかっている	○	4	2		0
310	ところ	○	2	2	2	0
311	ゝ より	☆			6	4
312	△ しもての		6			0
313	川の		4		2	0
314	ゝ 中を	○			6	0
315	目がけて ？	○	1	2	3	5
316	△ ぼんぼん		6			0
317	なぜこみました。##	○	3	1	2	6
318	どの					0
319	ゝ 魚も ？	○	1		5	5
320	△ 「とぼん」		6			3
321	と音を		4	1	1	0
322	立てながら ？	○		3	3	6
323	△ にごった		6			0
324	水の	○	4	1	1	0
325	ゝ 中へ	○			6	1
326	△ もぐりこみました。##	○	5		1	6
327	いちばん					0
328	ゝ しまいに ？	○			6	6
329	△ ふとい		6			0
330	うなぎを	○	2		4	0
331	つかみに	○	4		2	0
332	かかりましたが ？	○	2	1	3	6
333	△ 何しろ		6			0
334	△ ぬるぬると		6			0
335	△ すべりぬけるので ？	○	6			6
336	△ 手では		6			0
337	△ つかめません。##	は	6			6
338	ごんは					1
339	△ じれったく	は	6			0
340	ゝ なって ？	☆			6	6
341	△ 頭を		6			0
342	△ びくの		6			0
343	ゝ 中に	○			6	0
344	つっこんで ？	○	3	3		6
345	△ うなぎの		6			0
346	ゝ 頭を	○			6	1
347	△ 口に		6			0
348	くわえました。##	○	2	1	3	6

349	うなぎは					4
350	△ キュツ	は	6			0
351	ゝ と言って ？	○			6	6
352	△ ごんの		6			0
353	ゝ 首へ	○		1	5	1
354	△ まきつきました。##	○	5		1	6
355	その					0
356	ゝ とたんに	○		1	5	1
357	△ 兵十が		5		1	2
358	向うから ？		4	1	1	5
359	△ 「うわあ		6			3
360	△ ぬすと狐め」 ？		6			6
361	とどなりたてました。##	○	4		2	6
362	ごんは					0
363	△ びっくりして	は	6			0
364	とびあがりました。##	○	3		3	6
365	うなぎを					0
366	ふりすてて	○	3		3	0
367	にげようと	○	4	2		0
368	ゝ しましたが ？	☆			6	6
369	△ うなぎは		5	1		1
370	△ ごんの	は	6			0
371	ゝ 首に	○	1		5	0
372	△ まきついたまま	○	5		1	1
373	△ はなれません。##	○	5		1	6
374	ごんは					1
375	△ そのまま	は	6			0
376	△ 横とびに		6			0
377	とび出して ？	○	1	1	4	6
378	△ いっしょうけんめいに		5		1	0
379	△ にげて	○	5		1	0
380	ゝ いきました。##	☆			6	6
381	ほら穴の					0
382	ゝ 近くの	○			6	3
383	△ はんの	○	6			0
384	ゝ 木の	○			6	0
385	ゝ 下で	○			6	0
386	△ ふりかえって	○	6			0
387	ゝ 見ましたが ？	○			6	6
388	△ 兵十は		5		1	2
389	△ 追っかけては	は	6			0
390	△ きません	は	6			0
391	ゝ でした。##	☆			6	6
392	ごんは					1
393	△ ほっとして ？	は	6			6
394	うなぎの		4	1	1	0
395	ゝ 頭を	○	1		5	0
396	かみくだき ？	○	4	1	1	6
397	△ やっと		6			0
398	ゝ はずして ？	○	1		5	6
399	穴の		4	1	1	0
400	そとの ？	○	3	1	2	5
401	△ 草の	○	6			0
402	ゝ 葉の	○			6	0
403	ゝ 上に	○	1		5	1
404	のせて	○	3	1	2	0
405	ゝ おきました。##	☆			6	6